

第29回

開成町福祉作文コンクール

入賞作文集



ふれあいネットワーク



社会福祉
法人

開成町社会福祉協議会

小学生の部

優秀賞

◆開成町社会福祉協議会長賞◆

寄りそう心

開成南6年

うかいひなの
鶴飼日菜乃…1

◆共同募金会開成町支会長賞◆

僕のひいおばあちゃん

開成南4年

こばやし
小林 天聖…1

◆開成町教育長賞◆

電車に乗った時の出来事

開成南5年

みやうち
宮内 里彩…2

優良賞

手話を学んで

開成南4年

やまぐち
山口 未夢…2

ぼくのおばあちゃんは認知症

開成南4年

やました
山下 風翔…3

佳作

介護福祉士の仕事

開成南5年

ふじわら
藤原 葵衣…3

ぼくの弟

開成南4年

つゆき
露木 大晟…4

見えないところで

開成南6年

えんどう
遠藤 灯…4

大切なのは思いやり

開成南4年

ふかいし
深石 日葵…5

知る努力、知らせる努力

開成南5年

えんどう
遠藤 実柚…5

中学生の部

優秀賞

◆開成町社会福祉協議会長賞◆

お年寄りから学んだこと

文命3年

くりはら
栗原 悠輔…6

◆共同募金会開成町支会長賞◆

私たちができること

文命3年

きむら
木村みすず…7

◆開成町教育長賞◆

今できること

文命3年

わたなべ
渡邊 颯太…7

優良賞

骨折から教えられたこと

文命3年

いさのあやか
伊佐野綾花…8

身近な人から改めて感じさせられたこと

文命3年

こんどう
近藤 雄斗…9

佳作

私たちが作っていく環境

文命3年

もりた
森田 朱音…10

誰もが暮らしやすい町

文命3年

いのうえ
井上 優菜…11

アイバンク

文命3年

やまぐち
山口 凜…12

私の将来の夢

文命3年

すずき
鈴木 礼愛…13

永遠の課題

文命3年

かんべ
神戸 美菜…14

《資料》実施要項 審査員名簿

小学生の部



優秀賞

◆開成町社会福祉協議会長賞◆

寄り添う心

開成南小学校6年 鶯飼 日菜乃

私には、自閉症という障がいを持った弟がいます。また、私の祖父は、脳内出血で下半身不自由となり、49歳という若さで亡くなりました。そのため、私の家では、障がいについて話をする機会がとても多いです。病院で働いていた母は特に、障がいを抱えていた人々をたくさん目にしてきたので、

「子供のころから、様々な人とふれ合って、社会の現実を知っていく事は大切だよ。」

と、私に話してくれました。「もっと、障がいを持った人々の事が知りたい。」そう思った私は、今年の夏、地域の福祉活動に参加することにしました。

それは、開成町社会福祉協議会が行っている、「ふくし一日教室」です。ここで私は、認知症の方について教えてもらいました。

教えてくれた人は、認知症サポーターの方でした。その人は、「認知症の人の気持ちに寄りそうことが大事だ。」と言っていました。認知症になると、色々なことを覚えていられなくなるそうです。ご飯を食べたことを忘れてしまったり、さらに進行すると、自分の周りの人々のことも忘れてしまう

そうです。私の家族がもしそうなってしまったら、とても悲しいと思います。でも、本人は悪気がないし、一番辛いのは本人だから、間ちがいがたくさんあっても、責めてはいけないと思います。

これは、自閉症の弟にも言えることだと思います。弟は、脳の障がいなので、よく分からずに間ちがった行動をとってしまうことが多いです。私は、頭にきて怒ってしまうこともあるのですが、弟が悲しそうな顔をしていると、悪いことをしてしまつたな、と思うことがよくあります。弟と関わるのは、とても難しいのですが、認知症の人の話を聞いて、弟の事も、もっと理解してあげなければいけないな、と思いました。

障がいのある人と関わる上で私が大切だなと思つた事がもう一つあります。それは、その人が好きな事を一緒に楽しむことです。その人が好きな音楽と一緒に聞いたり、好きなテレビと一緒に見たり、出来る事はたくさんあるのだと知りました。幸せの形は、人それぞれちがうからこそ、その人のことをくわしく知る必要があるのだと思います。一人ひとりが寄りそう心を大切にして、笑顔あふれる社会にしていきたいです。

◆共同募金会開成町支会長賞◆

僕のひいおばあちゃん

開成南小学校4年

小林 天聖

僕のお母さんのおばあちゃんは、大正7年生まれで、今年の5月で98才になりました。僕の知

ている親戚の中では最高齢です。とても長生きで僕より88年も生きているなんてびっくりします。耳は少し遠いのですが、お話は大好きです。時々お母さんと病院へ面会に行くお母さんの名前を忘れて、「なんて名前？」と聞かれます。「天聖だよ。」と言うと、「え？」と聞き返されますが何回か言うと思ひ出してくれます。お母さんがぬり薬を背中にぬってあげると、足も腰もお願ひねと言って、とても気持ち良さそうです。おばあちゃんは、「みんなに迷惑をかけて申し訳ないから早くおむかえに来てほしい。」とこの頃よく言います。でもそれを聞くとても悲しい気持ちになります。よく「自分の命は自分で守る」と言うけれど、人の命も大切に守りたいので、そんな簡単に言わないでほしいです。おばあちゃんと一緒に入院している人です。おばあちゃんはまだお話もできるし若い時に大地震や戦争を経験してきたのだから、それを生かしてまだまだ元気でがんばってもらいたいんです。病院以外で僕の住んでいる地域の中には、お年寄りや体の不自由な人もいます。そのような人たちを見ると、「僕にできる事は何か？」と考えます。この間スーパーで買い物をしていました時、レジを終えたおじいさんが袋づめで困っていました。知らない人だから声をかけようか迷つたけれどお年寄りを助けたかったので、思い切って「僕が手伝いましょうか？」と言いました。「いいの？どうもありがとう。」とうれしそうな顔でお礼を言ってくれました。小さな事でも喜んでもらえてとてもいい気持ちでした。これからも自分にできることがあれ

ば、恥ずかしながらに何でもやりたいです。ひいおばあちゃんに対して僕のできる事は多くないけれど、お話をするなどできることをたくさんしてあげられたら笑顔になるかもしれないですね。ひいおばあちゃんを元気にしたいです。

◆開成町教育長賞◆
電車に乗ったときの出来事

開成小学校5年

宮内 里彩

夏休みに家族で、でかけた時の事です。その日は、電車に乗って出かけました。しばらく乗っていると体の不自由な子供とお母さんが乗ってきました。電車の中は、少し混んでいて座る所がなくて、こまっているように見えました。その時、親子の目の前に座っていた若いお姉さんが、その親子に「よかったらどうぞ」と声をかけて、席をゆずっていました。私はそれを見て、私は今まで声をかける事はできていなかったもので、ものすごくカッコいいな、ステキだなと思いました。私は電車やバスに乗るときに一つだけ心がけていることがあります。それは優先席には座らないようにしていることです。なぜならその席を必要としている人が気持ち良くすぐに座れた方がいいかなと思っただけです。私は前にテレビで優先席に健康な人が座っていて、にんぷさんに席をゆずらないのを見て、とても悲しく、いやな気持ちになったことがあります。そのことがきっかけでそうしていました。今日の出来事を見て、私は、みんな

が周りの人を少しづつでも気にかけて、体の不自由な人やお年寄り、にんぷさんや具合の悪そうな人などがいたら進んでどこに座っていても席を譲ってあげればいいんだと思いました。そうすれば、みんなが気持ち良く楽しんで、でかけることができると思います。そのためには、自然に声をかけられるようにしたいと思いました。今までの私は、知らない人に声をかけるなんて考えもしなかったし、何だかはずかしい気持ちがありました。でも今日のお姉さんのように自然にあいさつでもかわすかのように声をかけられれば、みんなが電車やバスに快やかに乗れるからいいなと思いました。最初はなかなか声をかけるのは勇気がいるから、できるか不安なので、優先席に座らないのはそのまま続けてやっていき、少しずつ声をかけられればいいなと思っています。

私が少しずつ声をかけていき、まわりの人やそのまたまわりの人にその気持ち伝わって、みんなが優しい気持ちになる社会になればいいなと思っています。



優良賞

手話を学んで

開成南小学校4年

山口 未夢

私は手話を習っています。手話を始めたきっかけは学校でろう者の勉強をし、きょうみをもったからです。そして、手話サークルに参加すること

にしました。

手話サークルでハンドサインのイベントに参加しました。ハンドサインは手話をしながらとてもかっこよくダンスをします。見ているわたしたちもとても楽しくて手話を受け入れやすかったです。ダンスを習っているわたしにはさらに手話にきょうみをもち勉強したくなりました。

手話サークルでは指文字から勉強しました。指づかいがとてもむずかしく、おぼえるまでがたいへんでした。今は自己しよいかいや日じよ生活の手話を勉強しています。

ろう者の人とふれあう時間もあり、今までもろう者の人たちと会うことがなかったのでもちきんちよしました。たとえ手話が上手にできなくても心と気持ちがあればろう者の人たちと会話することができました。しよがいがあつてもろう者の人たちはたくさんのしゆみをもっていることが分かりました。耳が聞こえなくてもスキーや野球、海にもぐる事ができるといふことをとても楽しそくに話をしてくれました。わたしは話を聞いてこんないろいろなことができることにおどろきました。

わたしが手話で「幸せですか?」と聞くと「幸せです。」と答えてくれました。たとえ耳が聞こえなくても手話によってわたしたちと同じように会話ができるので、しよがいがあつてもみんなと同じく「幸せ。」であると聞いてうれしく思いました。

手話を始めては金活動をしたり、クリスマス会ではろう者の人たちとげきをしたり、いろいろな



人とふれあうことができ、手話がとても楽しいです。

わたしは手話サークルに入って、ろう者の人たちと関わる中で、手話の大切さを知る事ができました。

しかし、まだまだ手話に対して知らない人たちが多くので、もっとみちかにふれあうことができればいいと思います。

わたしはこの秋に手話の検定をはじめて受けます。これからも手話をたくさん勉強してもっと多くの人に手話を広めていきたいです。

僕のおばあちゃんは認知症

開成小学校4年

山下 風翔 やました ふうとう

ぼくのおばあちゃんは、僕が生まれた時にはすでに脳の病気をし、認知症になっていました。

おばあちゃんが、家にいた時のことをぼくはあまり覚えていませんが、お母さんやお父さんがおばあちゃんのお世話を、協力してしていたことは今でも、覚えています。ときどきおばあちゃんと、いっしょにいろいろな歌を歌ったりかるたやランプをして、遊びました。妹はおばあちゃんの顔を、ふいてあげたりしていました。

そんなおばあちゃんも、今はかいごしせつで、くらししています。ときどきおばあちゃんに会いに行き、お話をしたりしています。そして、一年に一回あるかいごしせつのお祭りでいろいろやって、遊びます。会いに行くと僕の名前がわかると

きと、わからないときもあります。ときにはおばあちゃんの子どもであるお父さんの名前もわからなくなったりすることもあります。

そんなおばあちゃんに、ぼくがしてあげられることは、おばあちゃんになるべく多く会いに行く。いく時は必ずお名前を覚えてあげる。かいごしせつの際にはお名前を覚えておく。おばあちゃんに、おばあちゃんといっぱいふれあうておばあちゃんに、ずっと楽しく生きられるようにして、おばあちゃんのお世わもすっかりしてあげることだと思っています。

ぼくのおばあちゃんと、同じようにちいきには認知症の人がすんでいると思います。まだ認知症ではないお年寄りの人もいます。町の中でみかけたら、こえをかけて困っていることがないか、聞いてみたいと思います。困っていることがあれば、協力してあげたいと思います。それが、今自分にできる福祉活動の一つです。



佳作

介護福祉士の仕事

開成南小学校6年

藤原 葵依 ふじわら あおい

私は将来、介護福祉士になりたいと思っています。介護福祉士は、おじいちゃんやおばあちゃんをお世話したり手助けしたりする仕事です。私がこの仕事を知り、目指すようになったのは、私の母が介護福祉士だからです。母は、「援助だけな

くもって医療の面でも支えたい」との思いで、看護師になろうと勉強を頑張っていて、そんな母にあとがれるし、応援もしています。

母に、この仕事の大変なところを聞いてみると、二つ教えてくれました。言葉でうまく伝わらないときはどのように伝えるべきか悩むことがあります。また、スタッフの人数が足りない事によって、夜勤が増えます。そんなことを聞くと、私もその役に立ちたいと思いました。

でも、母は、そんな苦労もふき飛ばすのは「ありがとう」の言葉だと言っています。笑顔が見られたり、「ありがとう」の言葉をかけられたりすると、本当にうれしくて元気が出るそうです。

そんな母は、この前、熱中症でたおれた人を助けました。すごいなあと思いました。わたしは、今はそんなことはできないかもしれないけれど、いつか人を助けられる人になりたいと思いました。そこで、私が今できることを考えました。目が

見えない人には、声をかけたいです。電車でお年寄りの人に席をゆずると、声をかける勇気を出してみました。断られてしまうこともあるけれど、これからも自分ができる限り声をかけます。お年寄り、にんしんしている人、困っている人には、進んで声をかけたいです。それだけでなく、勉強もしっかりとやって、仕事をしていく基を身につけたいです。母のえいきょうからはじまった私の夢ですが、一つ考えていることがあります。

それは、私は歌ったりおどったりすることが好きなので、自分の得意なところも生かして楽しませることで、笑顔をもっと増やしていけるような

介護福祉士になりたいです。

ぼくの弟

開成小学校4年

つゆき
たいせい

大晟

ぼくの弟は、5才です。弟は、ママのお腹の中でけがをして生まれてきました。生まれて、今までに何回か手術をしてきました。病院に入院して、赤ちゃんなのにママとはなれて、ねているからすごいと思いました。治っていないところは、今でも病院に通っています。痛いこともたくさんして、いってがんばっているのでもえらいと思います。ママは、「ふ通の体に産んであげられなくてごめんね。」と言っていました。ぼくは、この言葉を聞いて、「ふ通」ってなんだろうと考えるようになりました。

ぼくにとつてのふ通とは、ごはんを食べる、学校へ行く、サッカーをする、友達と遊ぶ、ねることのように当たり前のことができていることだと思います。でも弟は、耳の中に水を入れたらいけないし、はげしい運動はしてはいけないなどやっではいけないことがたくさんあります。ぼくが弟にしてあげたいことは、いっぱい遊んであげたいし、ぼくが医者だったらすぐになおしてあげたいし、やさしくしたいです。これからも手術が何度かあるので、家の手伝いならなんでもしたいです。自分のことは、自分でやりたいです。

弟は、ぼくとすこしちがって生まれてきたけれど、少しずつなおって元気にすごしています。も

し、ぼくとちがった人を見かけても差別をしたりせずに仲良くしたいと思います。もしも差別をうける人がいたら助けてあげたいと思います。それをやり続けると、不自由な人と仲良くできると思っています。ぼくが6年生になったら弟が1年生になるので、困ることがあったら助けてあげたいです。弟が、1年生になったら楽しく学校生活が送れるようにぼくができることなら何でもします。妹も2つ下にいるので兄弟3人で学校に通うのが今から楽しみです。

見えないところで

開成小学校6年

えんどう
あかり

灯

私のお父さんは、腎臓ガンで右側の腎臓を取っていて、更に大動脈瘤解離という血管が裂ける病気をしています。でも、お父さんは一見、病気をしていない健康な人に見えます。しかし、歩く時には杖が必要だし、時には具合が悪くなって、立っていることさえ辛い時があります。そういう事があるのです、私はいつもお父さんが気がかりです。ずっと一緒にいられば介助してあげられるのに、と思います。

また、私のおじいちゃんは手術を7回もしています。体調が悪くなることもしばしばあります。まるで改造されたロボットのようにですが、見た目はとても元気で健康そうな人に見えます。でも、長い時間座っていることも辛いし、病院へ行くのもやっとの思いだそうです。

私のお父さんやおじいちゃんのように元気そうに見える人でも、実は病気を抱えていて、助けが必要な人がいます。そういう人はきっと普段の生活の中でも辛い思いをしているのではないかと思います。なぜなら、見た目は健康そうに見えるので、自分が病気だと言ったことをわかってもらえないからです。助けが必要でも気づいてもらえないのかもしれない。

もし私が病気を抱えていて、辛い時にまわりの人に気づいてもらえなかったら、とても悲しくなります。自分の抱えている病気のせいでできるはずのことができなくて、どかしくなり、本当は助けて欲しいと私だっただけ思うからです。できることが限られているお父さんは、時々「やりたい事ができなくて悔しい」と言います。

先日、お父さんは電車で席を譲ってもらい、とてもうれしかったそうです。それを聞いて、私も嬉しくなりました。そして、お父さんの気持ちに寄り添ってくれたその人を、心から尊敬したいと思いました。私もそういうことができる人になりたいです。

助けが必要なさそうな人でも、もしかしたら助けが必要かもしれないと言ったことに気づけて、その人の気持ちに寄り添えるような人が増えるといいなと思います。



大切なのは思いやり

開成小学校4年

深石

日葵

私の家には、おばあちゃんがいつしよに住んでいます。おばあちゃんはとてもやさしくて、色々なことを教えてくれます。料理のお手伝いをしたり、手げいも教えてくれました。また、車を運転して遊びに行ったり買い物に連れて行ってくれました。

でも、今年の春に重いもの運んでこしをいためてしまいました。病院に行ってみてもいいんですが、立ったり座ったりする動作が出来なくなりました。病院でもらったかたい板が入ったベルトをこしに強くまいて生活していましたが、いつも元気なおばあちゃんは自由に動けなくて、横になってる事しか出来ずとても苦しうでました。

それからわたしは、少しでも楽にすこす事が出来ないかと考えました。少しの動作で立てるように、ゆかにしてあったふとんを高くすることにしました。お母さんときょうりよくして、ソファーをたおしてベッドを作ってあげると、つかれた時はすわったり横になったりしてねることができました。それから少しずつよくなってきたおばあちゃんは、「歩くのも運動だからね。」と言って体力をつけるためにリハビリをがんばっています。買い物に行く時は、わたしもいっしょについていくことにしました。帰りは荷物を持ってあげるためですが、他にも手を伸ばさないとどかないもの

のや、かがまないと取れないものがあるからです。わたしは、前に福祉の体験に行ったことがありますが。年をとると目が見えにくくなったり、手足に力が入らなくて動かしにくくなるので体の不自由さを学んだのをよく覚えています。大切な事は、ふだんから相手を思いやりたり考えて行動することだと思えます。それは、家族や知っている人たちだけでなくて、わたしたちを見守ってくれている地いきの人たちや、体が不自由でこまっている人たちのためにも、はずかしがらずに声をかけたりお手伝いをして役に立てる人になりたいと思います。

おばあちゃんのこしも完全になおるまでにわたしにもできることを見つけていきたいと思えます。

知る努力、知らせる努力

開成小学校5年

遠藤

実柚

新聞のコラムの記事で「白杖で音を出す理由知って」という投稿を読みました。白杖で点字ブロックをたたきながら駅を歩いていた女性が、男性に「うるさい！」と怒鳴られてしまった、というエピソードでした。

私はこの記事を読んで、悲しい気持ちになりました。4年生の時に、総合の授業でアイマスク体験をしたことを思い出したからです。教室でアイマスク体験をしたのですが、その時の真っ暗で、どこに何があるかわからなくわかった気持ち思い出しました。きっと、この女性も同じように

不安を感じながら駅を歩いていたかもしれません。急に怒鳴られてさらにこわくなったかもしれません。

この記事を読んで知った事は、目の不自由な方は、周りに自分の存在を知ってもらうため、白杖で床を叩いて音を出していることです。これはタツテクニクというのだそうです。

最近歩きながらスマホを見ている人も多いので、タツテクニクはとても意味のある行動なんだなと思いました。ウォークマンをしている人も多く見かけますが、それだと音が聞き取りにくいので、私たち一人ひとりが周りに注意することが大切だと思います。

もしかしたら、怒鳴ってしまった男性は、白杖で音を出す理由を知らなかったのかもかもしれません。私も知りませんでした。私は、こうしたことをたくさんの方が知るといいなと思いました。障害がある人はいろいろな道具を使って、工夫して生活していると思います。生活をしやすいするための道具の事や使い方を私たちがもっと知ること、障害がある人への助けになると思います。

そして、相手の立場を思いやった声をかけることを大事にしていきたいです。これは障害がある、ないに関係なく、誰に対しても大切なことです。

福祉とは「みんなが幸せに暮らせること」だと総合の授業で学習しました。そのために相手のことを知る努力、自分のことを知ってもらう努力をこれからも続けていきたいと強く思いました。

中学生の部

優秀賞



◆開成町社会福祉協議会長賞◆

お年寄りから学んだこと

文命中学校3年

栗原 悠輔
くりはら ゆうすけ

日本はここ数年で急速に高齢化が進みました。生まれてくる子供の数が減る一方で、高齢者の平均寿命が少しずつ延びており、街には元気なお年寄りが増えています。

夏休みに町内のゲートボール大会に参加しました。正直、暑いし、練習は朝早くて5日間もあるし、参加することがとても面倒だと思っていました。実際、練習が始まると少し話をしている子がいるだけでお年寄りから注意されたりしてとても口うるさくて嫌でした。でも練習に参加するうちに段々と楽しくなってきました。ゲートボールも少しずつ上達し、色々な話をするうちに長生きしてきたお年寄りは、豊富な経験とたくさんの方の知恵を持っていることに気づいたからです。何度も注意したり、同じことや同じ話をするのはみんなに「良いプレーをしてほしい」「頑張っていてほしい」と思う気持ちからつい心配でうるさく言ってしまうかもしれません。また子供たちに「昔、こんなことがあったんだよ」と知ってもらいたいから、そして自分の経験から色々なことを教えてあげたいと言う「思いやりの気持ち」からつい話が長く

なってしまうのかもしれないと思ったのです。大会当日、試合には負けてしまったけれど、初めの怖い人、うるさい人というお年寄りの悪いイメージではなく、親切でやさしい良いイメージへと考えを変えられるようになったこととお年寄りの心を知る良い機会となりました。自分から心を開けばお年寄りは豊かな経験から色々なことを教えてくださいます。ほんの少し勇気を出してお年寄りに声をかけてみることでたくさんの方の事を学べます。そしてお年寄りとのふれあいを通してやさしさや思いやりも身につきます。これは将来、そして今現在もたくさんの方の人と接する中でとても大切なことです。今回、このゲートボール大会に参加し、町のお年寄りとの世代を超えた交流ができたことは本当に良かったと思います。これからも加速する少子高齢社会の中でもあります大切な行事になると思いました。

当たり前だと思っていたけれど人は誰でも年をとってきます。僕の祖父は近くに住んでいても会える距離にいるけれど、中学生になってからは部活や塾で会う機会が少しずつ少なくなってきました。たまに祖父母の家へ遊びに行くのですが、いつの間にか祖父は毎日出かけていた散歩の回数が減り、この頃は家にいることが多くなってきましたように感じます。祖母も元気ではあるものの足をささることが多くなり、立ち上がる時は「よっこいしょ」とテーブルや柱につかまることが増えました。祖父も祖母も年を取り、歩くための体力や、筋力が段々と衰えてきていることに気づいたのです。そしてそれは私達の体にもいつか必ず

おこる現象なのです。身近な人の様子が以前と変化していくことを実感した時、とても不安な気持ちになりました。でもそれは祖父自身の方もずっと不安に感じていることなのかもしれません。体や健康のこと、寝たきりや認知症など様々な不安をどこかで感じているだろうし、何よりこれまで楽にできていたことが急にできなくなってしまうたら誰だったたらまもなく不安や恐怖を感じてしまうはず。そんな祖父の不安や淋しさを少しでも理解できるようにするために、「自分には何が出来るだろう」と考えました。中学生の自分ができること、それはたまにじっくり話を聞いてあげたり、一緒にできる遊びを見つけてなるべくたくさんふれ合うようにすることだと思っています。そして大人になった時、少しでもお年寄りの気持ちを感じ取れる様な人になりたいと思います。まずは相手の気持ちを思いやるのが大切です。そして子供もお年寄りも体の不自由な人もたとえ国籍が違っていてもすべての人が共に手を取りあって歩むことができる社会が理想であり願いです。そのためには一人一人が「思いやり」を持つこと。そして相手の身になって考えてみる「想像力」が必ずやります。みんなが「思いやり」と「想像力」を働かせれば社会からいじめや自殺で苦しむ人も少なくなり、相手も自分も何ら変わりのない人間同士であることに気づくはず。みんなが生きて生きて幸せに暮らせる社会を目指し、勇気を持って社会に貢献できる人間に僕はなりたいです。

◆共同募金会開成町支会長賞◆
私たちができること

文命中学校3年 木村 きむら みすず

今、何の不自由もなく暮らせている事はとても幸せなことだと改めて思いました。

私は小学生の頃、アイマスクをつけて人に誘導してもらいながら歩く、という体験をしたことがあります。周りが何も見えない状態で歩いているので、階段から落ちたりしないか、当たったりしないか、など普段なら気にしないことでも不安になり、歩くのにも時間もかかりました。この体験をしたのは何年も前のことなのに、その当時のことをまだ鮮明に覚えているのは、周りが見えないということがどれだけ怖いことなのか、その時初めて知ったからだと思います。

この前街を歩いていたときに、杖を持ちながら歩いている人がいました。その人は点字ブロックを杖で確認しながら歩いていたのですぐに目が不自由なんだとわかりました。私が体験した時は福祉会館の中で、人があまりいなかったので誰かに当たるといふ心配はしていなかったけれど街を歩く場合は、周りにたくさん人がいるし、その他にも自転車などが通っているのでとても危険で危ないです。だから目の不自由な人が一人で歩くのはとても勇気のいることだと思います。多分歩いているときは、私を感じたように何も見えないという怖さがあると思います。どんなに街を歩くことに慣れている人でもその怖さは決して消える事

はないのではないかと思います。

そういう人に対して何かできることはないのかと考えました。例えば、点字ブロックの上は踏まないで歩いたり、ぶつからないように少しよけたり、私にできる事はそれ以外にもたくさんあると思います。安心して外に出られる環境を作ることができれば、目の不自由な人も今よりもっと安心して歩けると思うし暮らしやすい町になると私は思いました。目の不自由な人が気を遣って歩くのではなく、私たちがそういう人の気持ちを考えて行動すれば良いのだと思いました。

先日、駅で電車を待っているときに女の人が目の不自由な人のそばに行って声をかけて、一緒に階段をのぼっている人がいました。私は見ていただけで、何もできなかったのでもいつかあの女のように声をかけて、人の役に立っている人になりたいとその時思いました。その女の人の声をかけられた人は、多分嬉しかっただろうし、一緒にさうやってくれる人がいて心強かったと思います。女の人も声をかけるのに勇気がいったと思うし、恥ずかしかったと思います。それでも手助けしていい姿に感動しました。

これからは周りのことを考えて行動したいと思います。でも、助けたいとか、声をかけたいと心の中で思っているでも今の私は思っていることを行動に移せないと思います。だから、勇気をもって声をかけることから挑戦していきたいと思いました。この町に住んでいる人が不自由なく暮らせて幸せだと思えるように、そういう環境を作っていくことが私たちにできる手助けの一つではない

かと思っています。

あの女の人の姿を見て、私があんな風になりたかったように、いつか私がかかをして誰かがあんな風になりたいと思ってくれるような人になりたいです。

今、開成町はとても便利だと思えます。無料のシャトルバスがはしっていて町内をまわれるし、それになんといつても助けてくれる人がいる。そんな素敵な町で暮らすことができても嬉しすぎです。「十人十色」と言う言葉がありますが、人にはいろんな人がいます。いろんな人が意見を出してこの町のことについて話し合えば、この町に必要なことが分かりももっともって、住みやすい町になると思います。いろんな人がいるからこそ今がある、と思います。これから自分の事だけではなく周りのことも考えることが私たちにできることだと思います。

◆開成町教育長賞◆
今できること

文命中学校3年

わたなべ 渡邊 そうた 颯太

テレビのニュースで盲導犬を連れた男性がホームから線路に転落して死亡すると言う事故を知りました。

なぜ盲導犬を連れていたのに線路に転落してしまったのかと疑問に思いました。なので、この事故について調べることができました。新聞を見てみると事故の次の日から5日間ぐらい毎日新聞に載

っていました。その新聞の記事にはその男性はホームドアがない駅で盲導犬がホームの端から約1・2メートルの点字ブロックの所を歩き、男性がホームの端から6センチのところをひかれた白い点線付近を歩いており、それに気づいた駅員が、「白線の内側に下がってください。」とアナウンスをしたが間に合わなく転落してしまいました。原因として、盲導犬がホーム上の点字ブロックにかかっている柱を避けて歩いた、などがあります。

その事故のあった東京メトロ銀座線のホームドアの設置状況を調べてみると19駅のうち1駅にかついでなく、その1駅といっても片側のホームしかついでないということがわかりました。これについて駅ホームドアがついていればこの事故は防ぐことができ、誤って転落や列車と接触することも防ぐことができるなど他にも色々な事故を防ぐことができると思います。僕はサッカーの試合の行き帰りで電車を使うことが多く、今までに何度も人身事故で電車が遅れることがありました。実際に、小田原駅で人と電車が接触する事故を見たこともあります。ホームドアがあれば防げた事故だったと思います。しかし、ホームドアの設置がすすまない原因には、大がかりな補強や改修が必要なケースが多く、営業しながら工事を進めるのは難しいことがあるそうです。また、多額な費用がかかるということもあるそうです。

視覚障害者の団体の人達が事故のあった駅を視察しました。4人の方々が盲導犬を連れホームを歩きました。歩いた人は、「ホームが狭く、点字ブロックの上に柱がある。音の反響が大きく、周囲

の足音や気配を感じにくい。早急にホームドアを設置してほしい。」と言っていました。もう一人の方は、「盲導犬を連れられた人を見つけたら気にかけて、積極的に声をかけて。」と言っていました。事故があった駅にも、周囲には人がいました。しかし、誰も声をかける人はいなかったそうです。そこで誰かが声をかけていればこの事故は防げたかもしれません。

僕はこのニュースを見たとき、ホームドアがあれば、柱がなければなど色々と考えました。しかし、それはすぐに実現できないものですが、周囲の人が声をかけてあげるといことは人がいれば実現することです。勇気を持って声をかけてあげることができなかったからこういう事故が起きてしまったと思います。目が不自由な人の気持ちになればわかると思います。小学生の時に、目にアイマスクをして何もしていない人が隣で腕を取りながら誘導して学校内を一周するということを体験しました。その時、アイマスクをしていると隣の人が誘導してくれていても、何も見えず目の前が真っ暗で一步一步確かめながらじゃないと怖くて歩けませんでした。階段は特に怖く降りるのにもいつも2倍以上の時間がかかってしまいました。その後、アイマスクをしている人を誘導することも体験しました。誘導するときには、アイマスクをしている人はやっぱり怖いのか一步一步確かめながら歩いていました。なので、曲がる時には声をかけながら誘導しました。終わった後に、「声があると歩きやすかったよ。」と言われました。目が不自由な人にとって声はとても大切なんだと思

ました。学校などの慣れている場所でアイマスクをして歩くのも怖いのに、駅など慣れていない場所ではそれ以上に怖いと思います。そういうときに重要なのが声だと思います。

「声をかける」これが目の不自由な人に対して誰でも今できることです。どこかで困っている人を見かけたら、勇気を出して声をかけられる人になりたいです。



優良賞

骨折から教えられたこと

文命中学校3年

伊佐野 綾花

それは、一時間目の体育の時間のことでした。

跳び箱の授業で私は思い切り走り出しました。跳び箱に手を着き、跳ぼうとした瞬間に左腕に激痛が走りまわりました。私は何が起きたのかわからないまま、マットの上に着きました。すると先生や友達が私の方に寄ってきて、「えっ。どうした?」と声をかけてくれましたが私は腕が痛すぎて、声が出せませんでした。そのまま保健室に行きましたが、保健の先生に「もしかしたら骨折しているかもしれないので、おうちの人来てもらって病院に行った方がいいね。」と言われ、打撲くらしいに考えていた私は怖くなり、少し青ざめました。病院に着き、待合室で待っていた時間が私にはとても長く感じました。その時私は「もし骨折していたらどうしよう。部活のテニスの試合が近い

の：「どうか打撲でありますように」と祈っていました。

レントゲンを撮り終わり、診断結果を医師に言われる時も私の心臓はバクバクしていました。

レントゲンを見ながら医師は、「左橈骨頭骨折ですね。」と言いました。そして、私の頭では骨折という言葉が何度もりピートされました。打撲と祈っていた私には、とても辛い言葉でした。その後、医師から「手術は必要ないけど8週間以上はギブスですね。」と告げられました。

左の腕に大量の包帯を巻かれながら、私は医師に「2ヶ月後にどうしても出たいテニスの試合があるのですが、その試合には出られそうですか？」と聞きました。すると、医師は「厳しいですね。」とだけ言いました。その時の私の気持ちは絶望的だったのを今でも覚えています。

病院から帰ってきて、部屋着に着替えようとした時いつものように服が着られず、お母さん無しでは生活ができないと実感しました。

骨折してから大変な事は、それだけでは終わりませんでした。例えば、お風呂に入る時です。ギブスが大きすぎて、腕に家庭用のゴミ袋をかぶせて水が入らないようにしたり、学校生活では、筆箱のチャックを閉められなかったり、左手で紙を押さえることができなないので、消しゴムで文字を消すこともできませんでした。

私は、骨折してから「こうであつたら良いのになあ。」と思ったことがあります。それは、エレベーターに乗った時の行きたい階の選択です。右手に荷物を持っていたので両手が使えない状態にな

り、ボタンを押すことができませんでした。そんな時、声認証の機能があつたらいいのになと思えました。この機能があつたら、手が不自由なくさんの人も楽にエレベーターを利用することができると思っています。私は、部活もできなくなってしまうので骨折は絶対にしたくないと思っていたけど、元気な時は決して気付かなかった困難にも気付けたので、良い経験だったのではないかと今では思っています。

世の中には、骨折以外にも手の不自由な人がいます。よく、足の不自由な人のためのバリアフリーは見かけますが、手の不自由な人のためのものはあまり見たことがありません。なので、もう少しそのような人の為にも生活が困らないような工夫を増やしていくべきだと思います。

私が骨折して学んだことは、それだけではありません。それは、周りの人が自分のそばにいてくれると有り難いことです。これも、自分が怪我をするまでは気付かなかったことです。私はみんなの練習をベンチで見ている時、休憩の時間に友達や先輩、後輩たちが話しかけてくれていつも前向きな気持ちになれました。私はその時、思いやりとはこういうことだったのだなと肌で実感することができました。私は、骨折を乗り越えられたのは身近にいる人の支えがあつたからだと考えています。なので、今度は私が助ける番なので困っている人を見つけたら、自分から進んで助けようと思いました。

身近な人から改めて感じさせられたこと

文命中学校3年 近藤 雄斗 こんどう ゆうと

私には、足が悪い祖母と、軽い脳梗塞を患った祖父がいます。

祖母は、以前まで自分で買い物に行き、重いものでも自分で持って運んできた時、食事を作るときは、長い時間キッチンに立ち、おいしい料理を作ってくれたり、家事も完璧にこなせていましたが、今ではそのようなことができなくなりつつあります。買い物で特に重いものを買うときは、人に頼んで買ってきてもらい、長時間キッチンに立っている時、「足が痛い。」と言って、椅子に腰を掛けたり、家事も、以前よりも、スピードが遅くなっている気がします。また、私が一番祖母の事が心配になったのは、階段を上っているときで、祖母が、足に手をあてながら上がっているのを見た時、「あんな大変そうに上がるのはかわいそう。もっと楽に上がる方法はないか。」と感じ、私はその時、手すりや、スロープを思い出しました。手すりやスロープは、自分たちから見たら、なんともないもののように見えるが、高齢の人達にとっては、とてもありがたいものだと感じるようになりました。

しばらくして、祖父母の家の階段には手すりが付けられ、私は祖母が足をおさえないうで、楽そうに階段を上っているとところを見ると、とても嬉しくなり、それよりもうれしかったことが、祖母が、「階段を上るのをためらわないうで済んでいる。」と言っていたことです。私はその言葉を聞いた時、「これで祖母が生活しやすくなったのではない

か。」と思った。

祖父は私が小学生の時、毎日のように自分の家ではなく、祖父母の家に来る私に対して、キョッチボールや、サッカーなどをしていっしょに遊んでくれました。しかし、今は、軽い脳梗塞を患い、そのようなことがしにくくなってしまいました。

しかも、喋り方が少し変になってしまふなどしてしまったり、祖父がそのような状態になってからは、会う機会や、話す機会が少なくなっていくました。心のどこかで、以前のように一緒に遊んだり、話したりできなくなってしまふのを受け入れられなかったのかもしれない。

そんなある日、久しぶりに祖父と会い、一緒にお風呂に入ったとき、手すりがあり、私は普段その手すりに、ぶらさがったり、何も気にしなかったけど、祖父は、「これがあると安心して安全に入れる。」と言っていて、そのことに疑問をもち、くわしく聞いてみると、入るときに、「足がお風呂の床に滑ってしまうのが怖い、この手すりがあると、安全に入れる。」と、言っていました。私はそのとき、祖母も同じようなことを言っていたと思いい、自分達から見ると何ともないものが、高齢の人達からすると、自分達の生活を助けてくれるものでもあることを、再び感じさせられました。

このように、自分達の身のまわりには、自分たちには必要なくても、他の誰かからは必要とされていて、その人を助けていることがわかり、今回の体験で福祉に対する思いが変わり、高齢の人達が大変なことや、苦勞していることなどを改めて感じさせられたことがたくさんありました。

また、私達が気づかないところでも、お年寄りの人達は、物のどういったところが不便か、どういったところを直してほしいかなどを思っているかもしれない。そのような問題を解決するために、お年寄りの人達と会話する機会をもっと増やし、生活での不便な点があるか、その人達だけにしかわからないことなどを聞く取り組みを積極的に設けた方が良いと思います。

今まで自分は、お年寄りのことにはあまり興味をもっていなかったが、今回の体験により、このようなことを自分がそういう立場だったらどう思うか、どうすればよくなるかなどを、真剣に考え、これからも福祉のことに、目を向けていきたいと思えます。



佳作

私達がつづいていく環境

文命中学校3年

森田 朱音 もりた あかね

私が毎年参加させてもらっているボランティアの話と最近電車で盲導犬を見たときの自分の気持ちを書いていこうと思います。

私は毎年部活動で12月にかかるがもの会のクリスマス会のボランティアをさせてもらっています。かるがもの会とは障害を持っていらっしやる方の親御さんとその家族の会です。クリスマス会には障害を持っていらっしやる方とその家族の方々がきます。私たちは吹奏楽部で演奏させてもらった

り、障害を持っていらっしやる方と一緒にゲームをして遊んだりします。障害を持っていらっしやる方が演奏を喜んでくれたり、一緒にゲームをする事を楽しんだりしてくれるのは凄く嬉しいです。また障害を持っていらっしやる方の親御さんと家族の方々も、障害を持っていらっしやる娘さん息子さん喜んでくれたり、楽しんでくれたりしている姿を見て、私達にありがたうと声をかけてくれることも嬉しいです。ボランティアをしていて、人の役に立つことが出来ると少し実感することが出来ます。こういう障害を持っていらっしやる方と触れ合う機会はありません。なのでもう少しこういう機会を増やしてもらいたいです。私は障害を持っていらっしやる方の声をもっと聞いてみたいです。生活する上でどのようなことに困っているか、障害を持っていらっしやる方が自分自身でできること、お手伝いが必要なことは何かを色々聞けたらもう少し自分にできることを探せると思います。少しでもこういう風に役に立てることがあればいいと思います。かるがもの会というのは障害を持っていらっしやる方の母親が育児ノイローゼから泣きやまないわが子を布団で窒息死させてしまったという事件がきっかけで障害を持っていらっしやる方の親御さんとその家族で作った会です。こういう事件がきっかけでできたと聞いたので私は親御さんとその家族の方々に疲れを溜めないような環境が作れたらいいなどと思います。

この間、電車で初めて盲導犬を連れてる人を見ました。その盲導犬が目が不自由な方を上手に



リードしてしまいました。それを見て私は、盲導犬は偉いなと思いました。あともう一つ盲導犬を見て思い出したことがあります。それはまえにニュースで流れていた、目が不自由な方と一緒に歩いていた盲導犬をナイフで刺したという事件がありました。そのニュースを見たとき凄く衝撃を受けたのを覚えています。その盲導犬は目が不自由な方をリードするという大事な仕事でだし盲導犬が騒いでしまうと目が不自由な方が戸惑ってしまうからなにも痛がる仕事もせずナイフで刺されていても静かに迷わず自分の仕事を果たし続けていました。利口だと思いません。ナイフで刺された傷が浅い深い関係なく痛いによく耐えたな、頑張ったなと思いました。その盲導犬に対して感動しました。犯人はとても許すことができないなと思いました。その盲導犬の怪我に気づいたのは周りの人でした。盲導犬を連れていた目の不自由な方は自分で気付いてやれなくて悔しかったと思います。それと不安になったとも思います。私は目の不自由な方をそんな不安にさせたらダメだと思えます。もっと安心して生活ができる環境を私達が作らなければならぬと思います。

まとめると私がこの2つの話から思ったのは障害を持ってらっしゃる方々が安心して暮らせる環境と障害を持っていらっしゃる方の親御さんとその家族が疲れを溜めないような環境を私たちが作ってあげなければいけないなと思いました。そのためには障害を持ってらっしゃる方々と触れ合う機会を増やしたいなと思いました。なので、かるがもの会のクリスマス会以外にもボランティアに

参加してみようと思います。障害を持ってらっしゃる方に困っている事、自分でできること、お手伝いが必要なことなどお話を聞いて、私達がお手伝いできることを探してみようと思います。親御さんや家族の方々の力になれば嬉しいと思います。

誰もが暮らしやすい町

文命中学校3年

井上

優菜

てあげることが一番だと思います。目が不自由な方以外にも、お年寄りも暮らしにくいことがたくさんあると思います。私の曾祖母は何度も同じことを言ったり、すぐに忘れてしまったりしていました。このような場合でも、確かに医療の進歩も大事だと思いますが、周りの人がフォローしてあげて、メモ帳に書いてあげるなどと工夫してあげることが大事だと思います。スマートフォンのないいろいろなことを記録したり、写真を撮ることができて簡単な操作で出来るものなどがあっても便利だと思います。

私は以前、静岡県にある盲導犬センターに行ったことがあります。そこでは、将来盲導犬になる子犬の見学、目が不自由ということを経験できるものなどがあります。その一つのサンングラスのよくなものをつけると、様々な不自由を体験することが出来る物を私も体験しました。それは、本当に真っ暗でとても不安になり、自分が真っすぐに歩いているのかも分からなくなるといふ感覚になりました。「毎日この状態が続くと思うと、私には考えられません。」外で歩くのなんて、怖くて無理だと思いました。なので、私は本当に自分の目が不自由だったら、どのような町が暮らしやすいのか考えました。私は、信号機で音が鳴るようにたくさんの方が鳴るといいのではないかと思いました。例えば、人とぶつかるのを防ぐため、人が近づいたら音が出る機械や、歩くとき音の出る点字ブロックです。音以外にも、段差があるのを教えてくれるブザーや町自体に点字ブロックをもっと増やすということです。しかし、周りの人が助け

私の祖父はNPO法人の知的障害者施設で働いています。施設を利用していらっしゃる方々の家族の方は少しでもひとりにすると、どこかに歩いてしまっただけでいなくなるから「仕事に行っている間、誰も面倒を見る事ができない」など利用者の方が一人になるのが不安で施設を利用していることが分かりました。そこで、私はもし自分が施設の利用者だったら考えました。私だったら、施設に入れられるのよりもなれていく家にいたいと思うと思います。なので、私は知的障害をもった方がより暮らしやすくするために、ヘルパーさんのような利用者さんの家族の代わりになってくれるような方が家に来てくれるシステムをもっと増やして利用したいと思う人が全員利用できるような方がいいなと思います。定期的に動物とのふれあいもあるといいと思います。現在、アニマルセラピーというお年寄りの方と犬たちがふれあうことで認知症などが少しずつおさまると言う活動が老人ホームなどで使われています。その、セラピードッグ

グと利用者さんがふれあうことで、何かが変わると言うことはないとも言切れないと思います。

しかし、このアニマルセラピーは全ての、老人ホームや児童福祉施設、知的障害者施設で行われていないのが現実です。日本では、盲導犬や介助犬、聴導犬、身体障害者補助犬がいます。その犬たちを、必要としている方が日本だけでもたくさんいます。なので、誰もが暮らしやすい町や国にするための第一課題は、人間の生活を支援する犬を増やすことだと思います。第二課題は、老人ホームや知的障害者などの建物の形だと思います。四角形の建物がやはり多いと思います。私は円形が良いと思います。広いリビングのような感じで円の周りを一人一人の部屋にすれば、スタッフさんが誰がいなくなっただかが分かります、利用者さんが自分の部屋を出れば、みんながいるリビングにすぐに出れて、利用者さんと利用者さんのふれあいの輪が広がると思います。利用者さん同士が仲良いの

も大事です。

私は結局、第一課題よりも第二課題よりも周りの人の心の優しさなどが何よりも一番大切で重要なことだと思います。周りの人は、家族、スタッフさん、近所の方、同じ町や国の人、同じ利用者の方、その家族の方など何をするにしても周りの人がいることで成り立っているんだと思います。周りの人がしなければいけない事は、お年寄り、障害者の方だからといって差別しない、人生に一回は必ず福祉にふれるという事はあると思うので、自分はどうすればこの方の不自由を軽減させられるかを考えて行動するなど、特に優しさが大事だ

と思います。

アイバンク

文命中学校3年

山口 凛

私は去年の11月におじいちゃんをなくしました。私はその時に、死後に角膜を提供する機関「アイバンク」の存在を知りました。

ここからの話は、おばあちゃんとお母さんから聞いた話です。まだひいおばあちゃん、おばあちゃんのお母さんが生きていた頃、ひいおばあちゃんがこう言ったそうです。

「私が死んだ後も、少しでも誰かの役に立ちたい。」

そこでおばあちゃん達はひいおばあちゃんから「アイバンク」を紹介されたそうです。ひいおばあちゃんは登録済みで、おばあちゃんとおじいちゃんも今から30年ほど前に登録を行ったみたい

です。私はこの話を聞いてまず凄いなと思いました。最近学校でのアンケートでも同じようなのがありました。あなたは死後に臓器を提供してもよろしいですか、と。私は迷わず、はい。を選びました。おじいちゃんのこともあり、迷う理由はありませんでした。けど実際は？死ぬなんて考えたくもない事だし、自分の臓器が他の人の一部になるなんて、いやな人もいると思いました。けれどそれで助かる人がいる。目が見えるようになる人がいる。命が助かる人もいるかもしれない。希望が見える気がしました。だけど、この作文を書いている今

も、どう言葉に表したらいいのか、まとまっていません。けれどとにかく、すごく、この行動が素晴らしいと思いました。

おじいちゃんが亡くなってから数日後、アイバンクに目の角膜を提供するため、東大から若い先生方が数人来られました。そしておじいちゃんの寝ていた部屋で手術が行われました。手術後、おじいちゃんの手が死後初めて触れました。とても冷たかった。皮膚が硬くなっていました。自分はこの温かくて色があるのに、おじいちゃんの手は真っ白でした。その時私は何故か恐怖を感じました。命の重さを噛み締めました。

おじいちゃんのお葬式にアイバンクから賞状が届きました。感謝状でした。おじいちゃんが提供した角膜は既に2人の方に使われたそうです。それはとても誇らしいことだと感じました。

私はこの福祉作文を書くにあたって、お母さんとも考えました。最近経験した福祉がすぐそばにありました。それが「アイバンク」でした。知ってみたら自分が出る最高の人助けなんじゃないかなと思います。たとえば、自分の命を捨てて人を助けられますか、という質問があれば、はい。できます。と答える人もいるかもしれません。ですが実際自分がその場に居合わせたら、自分の命を捨てる人は少ないでしょう。餓死寸前の状態で数少ない食料を分けてくれと言われたら、隠し持って一人で食べるでしょう。家族だったら分けませんが、たとえなのに酷い話ですが、私も自分の命と他人の命を天秤にかけたら、自分の命を取ります。けれど、命ってすぐ見捨てていいほどかるい



物ではないと知っています。命とは一つしかない、今も一度しかない、このことを、私はよく考えるのですが、すべきことが見つかりません。今、学校で勉強をひたすらやって将来のために過ごすのか、友達と遊んだりゲームをしたりして今、楽しいことを優先させていいのか。どちらも効率よくできるなんて憧れですよ。こんなことを考えながら書いていると、まだまだすべき事もやりたいたいこともできて楽しいです。

話に戻りますが、「アイバンク」についてお母さんと調べました。私達にも何かできることがありそうです。なので、登録を考えています。自分の一部が人に使われるなんて状況は生きているうちにはないと思います。怖いです。けれど自分の死後、角膜を提供して救われる人がいるなら、すごく良い事をできるのではと思いました。生きていくうちでもできる人助けがあります。近所でも、道に迷っている人に声をかけられたら案内します。かんたんにできることもあります。「アイバンク」の良さを自分も知れた作文になりました。

私の将来の夢

文命中学校3年

鈴木 礼愛

私は自分が福祉作文を書くにあたって不意に考えました。「福祉」とは何だろうと。社会貢献などのイメージが強いですが、実際のところは幸い、幸福と言う意味でした。私はイメージと全然違っていて少し驚きました。私はこの作文がきっかけ

で、初めて「福祉」という言葉の重みを感じました。

私は将来、看護師を目指しています。もう中学

意味の捉え方は人それぞれですが、私には看護師になりたい理由を探すきっかけになった言葉でした。

3年生なので、そろそろ将来が身近に感じられるようになりました。もちろん、私の夢の看護師になるには、たくさん勉強して多くのことを学ばなければなりません。私の家族は5人家族で、3つ年上の姉、双子の妹がいます。姉も私たちと同じ受験を控えていて、看護師になることが将来の夢で、受験をするのも看護系の専門学校です。私の家の姉妹は皆、看護師になることが夢ですが、理由はそれぞれ違います。自分にはあまり、はっきりとした理由はありません。物心ついた時から看護師になることが夢でしたが、あまり深く考えたことがありませんでした。看護師だった祖母に影響されたということもありますが、もっと他に理由があるかと思いました。そうして、福祉作文のために引いた辞書で「福祉」という言葉の意味を目の前にして「これだ」と直感しました。これを読んでいる人から見れば「そんなきれいなこと」と思いかもしれませんが、どんな形であってもその心は一緒です。自分が看護師になりたい理由は「一刻も早く患者さんに元気になってもらいたい」と気持ちでした。なぜ、この様なことを考えたかと言うと、医療現場のドキュメンタリーを見たからです。病院の小児科にはまだ自分よりも全然小さい子供が入院しています。その子供たちが闘っている姿を見て、なんとも言えない悲しい気持ちになると共に、あの子供たちが元気になるまで支えてあげたいと思いました。「福祉」という言葉の

その為に、今の私にできる事は勉強です。もっと勉強して、今よりたくさん知識を身に付けてはいきたいです。だから、もっとたくさん経験をしたいと思っています。看護師といっても本当に様々なことをするのでもっと身近な所で色々な経験をしたいと思ひ、高校の進路も看護により近い高校を重視して決めました。最近、神奈川県では県立高校改革と言うものが行われていて、様々な高校が変わろうとしています。私の第一志望であるその高校も県立高校改革を機にインクルーシブ教育の実践校になりました。インクルーシブ教育とは、障害者とともに同じ教室で学ぶ、という教育の方針のことです。最近では、なぜか障害者の方々が「なんとなく」で悪く見られがちですが、そうではありません。彼らも私たちと共に学校へ来て学ぼうとしています。これは私にとって良い経験をできる機会になると確信しました。だから、私の第一志望はインクルーシブ教育の実践校です。私はまず、看護師になる目標の第一歩としてその高校に入れるよう勉強することを目標にしました。

私はこの福祉作文が、私と同じように「福祉」について考えるきっかけになったら嬉しいなと思ひました。私と同じように「福祉」という言葉の本当の意味を知らない人が、まだいっぱいいると思ひます。そういう人々が「福祉」について知ってほしいと思ひました。きっかけは様々ですが、

ぜひこの福祉作文をきっかけに知ってほしいです。私にはこれからたくさん経験をする機会があります。だから来年高校に行けた時、高校ではどんな経験ができるのか楽しみです。私はこれまで「福祉」のことなど少しも考えずに生きてきました。でも、こうして福祉作文が福祉の事について知れるきっかけになって良かったと思っています。そうでなければ、私は福祉の事を全く知らない看護師になっていたかもしれません。福祉作文は私を成長させてくれる良い機会になりました。これからも看護師になれるように一生懸命がんばって勉強したいと思いました。

永遠の課題

文命中学校3年

かんべ 神戸

み な 美菜

私たちの学校には、あるものが後から取り付けられました。それは、エレベーターです。そのエレベーターに私は乗ったことが一度もありません。いや、私だけではなく、学校のほとんどの人が一度もそのエレベーターに乗ったことがないと答えると思います。では、なぜ取り付けられたのでしょうか。

私たちの学校は昇降口も2階にあり、理科室や音楽室などよく使う教室も別の棟にあります。また、私たち3年生はクラスによって階が違います。そのため、上の階と下の階ののぼり下りを一日だけで何度もします。その時の移動手段は、以前は階段だけでした。しかし、エレベーターが取り付

けられ移動手段が2つに増えました。

それには、理由があると思います。みんながみんな階段を自由にのぼり下りすることができなければなりません。そんな人が、上の階や下の階に移動するときは、どうすればいいのでしょうか。そうなんです。そのために、エレベーターが取り付けられたのです。実際に私の周りでも骨折など、階段での移動を自由に行うことができない怪我をした人がエレベーターを使用しているを見たことがあります。

そして、私の学校の外にはスロープと手すりもありました。ついこの間まで、存在すら知らない2つだけど、実際に使用しているのを見て、たしかに必要な場所にあるんだなと思いました。私がエレベーターやそのスロープを使用する事は一度もないと思います。しかし、そんな小さなものを取り付けられただけで、今まで、ずっと小さな動作に困っていた人が笑顔になることを忘れないようにしたいです。

この福祉作文を書くまで、エレベーター、スロープ、手すりの存在の大きさに気づくことがありませんでした。しかし、実際に見ると大きな役割があるんだなと感動しました。しかし、私はそれと同時に責任を感じました。このような、便利なものが増えることで、なんでも一人でできるようなになると私はかん違いをしてしまう人も増えると思います。しかし、そうではないと私は思います。そのような便利なものは不自由な人が一人で出来るように存在しているのではなく、不自由な人の手助けとして存在しているなど私は思っています。

だからこそ、彼らに私たちが手を差し伸べてあげたいと強く思いました。一人ひとりのその心が、彼らの「一番よろこび助かる手助け」になるのではないかなと思いました。

エレベーターやスロープ等の取り付けもたった一人のために行った事かも知れないです。しかし、みんなが自由に生活でき、幸せに暮らせるために取り付けられた、みんなのためのものなんだと思いました。不自由な人の手助けとして存在しているエレベーターは、実際には使用されない方がいいのかもしれない。なぜなら、困っている人がいないということだからです。しかし、もしもの時のためにあったほうがいいものだと思います。私は、もっともっと、使用はされたいがあつた方が良いものがこの町に増えてほしいと願っています。それと同時に私たちが彼らに手を差し伸べる回数も増えてほしいです。そのために私は、学校で困っている人がいたら何をしたら、喜ぶかを考えて自分なりに手を差し伸べたいです。一人ひとりがそれを考え、周りの人や町に広めるのが私の目標であり、私たちの町の目標だと思います。

みんなが自由に幸せに暮らすのは、すごく難しいことだと思うけれど、まずは自分から始めたいと私は思いました。そんな一人の気持ちが始まり、困っていた人が笑顔になってくれたら、嬉しいです。それは、私たちへの永遠の課題だと思います。

第29回開成町福祉作文コンクール実施要項

1. 目 的

“ともに生きる福祉社会づくり”をめざし、次代を担う町内の小・中学校の児童・生徒を対象に福祉作文コンクールを実施し、作文を通して社会連帯を基調とした福祉への理解と関心を深め、福祉活動への主体的参加意識を育成することを目的とする。

2. 主 催

社会福祉法人開成町社会福祉協議会 共同募金会開成町支会

3. 後 援

開成町教育委員会

4. 協 力

開成町立開成小学校 開成町立開成南小学校 開成町立文命中学校

5. 作文の内容

児童・生徒が、福祉について日常生活を通して感じたこと、考えていること、体験したこと、こうしていきたいと思っていること等を自由に表現した作文とする。

6. 募集の方法

町内の小・中学校に「募集案内」配布いただくとともに、「社協だよりかいせい（7/1 発行）」やホームページを活用して、募集の周知を図るものとする。

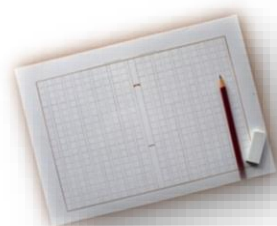
7. 応募の方法

- (1) 資 格 開成町内在住の小・中学校の在籍者
- (2) 題 名 福祉に関する作文で題名は自由とする
- (3) 用紙・字数 小学生はB4判の400字詰め原稿用紙1,000字以内
中学生はA4判の400字詰め原稿用紙1,800字以内
※コピーは不可とする。
※原稿用紙の最初の3行に題名、学校名、学年、組、氏名（ふりがな）を明記する（文字数に含まれます）。
- (4) 締め切り 平成28年9月1日（木）
- (5) 提出先 開成町立小・中学校の在籍者は各学校へ提出。
それ以外の方は開成町社会福祉協議会事務局へ提出（送付可）。

8. 審査の方法

- (1) 別に定める審査要領により構成される審査会にて審査する。

審査会：平成28年9月28日（水）午後3時から



9. 表 彰

表彰式を開催し、入選者には、それぞれ賞状と記念品を贈る。

(1) 表彰の種類

①優秀賞（小・中学生の部各3編 計6編）

○開成町社会福祉協議会長賞

○共同募金会開成町支会長賞

○開成町教育長賞

②優良賞（小・中学生の部各2編 計4編）

③佳作賞（小・中学生の部各5編 計10編）

(2) 参加賞

上記3賞に入選した児童・生徒も含め、全応募者に対し参加賞を送る。

（神奈川県福祉作文コンクール主催者より）

(3) 表彰式

①期 日：平成28年10月30日（日） ＊開成町福祉大会に於いて

②会 場：開成町福祉会館多目的ホール

10. 審査結果

(1) 入選者に対し、開成町立小・中学校在籍者には、学校長などを通じて報告する。

(2) 開成町立小・中学校の在籍者以外の方には、社会福祉協議会から直接報告する。

11. 発 表

(1) 入選者は、平成28年11月発行「社協だよりかいせい」に掲載する。

(2) 入選作文を第29回開成町福祉作文コンクール入賞作文集入選作品集に収録し、関係機関へ配布する。

12. そ の 他

(1) 入選作文の中から、応募編数に応じて上位入賞作文を第40回神奈川県福祉作文コンクールに応募する。

(2) 敬老会にて小学生1編、中学生1編、社会福祉大会にて小学生、中学生の部より各1編（敬老会朗読作文を除く最上位入賞者）朗読いただく。

(3) 応募作品は返却しないこととし、作文の使用に関する権利は主催者に属する。

(4) 応募作品により収集した個人情報、本事業に関すること以外に使用しない。

(5) 広報紙等の紙面に作品が紹介される場合があるため、個人情報保護の観点からご本人やご家族・関係者等へ十分配慮する（必要に応じて事前承諾を得る）。

13. 問い合わせ

社会福祉法人開成町社会福祉協議会

〒258-0021 開成町吉田島 1043-1（町福祉会館内）

TEL 82-5222 / FAX 82-5928

第 29 回 開成町福祉作文コンクール 審査員名簿

所属機関・役職名	審査員名
開成町立開成小学校 教諭	細 川 澄 子
開成町立開成南小学校 教諭	大河内 泉
開成町立文命中学校 教諭	松 村 徹
開成町教育委員会 教育指導専門員	瀬 戸 成 男
開成町民生委員児童委員協議会 主任児童委員	石 渡 和 美
ボランティアグループ 四つ葉	落 合 ふたば
開成町老人クラブ連合会	井 上 城 司
開成町身体障がい者福祉協会	遠 藤 伸 一
開成町心身障害児者と家族の会かるがも	水 谷 美智子
母子寡婦福祉会 つくしの会	三 浦 圭 子
開成町 福祉課長	小 宮 好 徳
開成町社会福祉協議会 常務理事	影 山 尚

9月28日（水）の審査会にて、代表作文を審査いただきました。

順不同 敬称略

■発行日／ 平成 28 年 10 月

■発 行／ 社会福祉法人開成町社会福祉協議会

神奈川県足柄上郡開成町吉田島 1043-1（開成町福祉会館内）

TEL 0465（82）5222 FAX 0465（82）5928

URL : <http://www.kaiseishakyo.jp>

Email : network@kaiseishakyo.jp

田舎モダン



開成町
kaisci town